

# デート DV 加害・被害深刻度質問紙及び デート DV 支配・被支配度質問紙の作成

松野 真<sup>1</sup> 新井邦二郎<sup>2</sup>

本研究は、これまでのデート DV の実態を捉える指標として用いてきた暴力となりうる行為の加害頻度・被害頻度に加え、行為の深刻度を加味した「デート DV 加害・被害深刻度質問紙」を作成しデート DV の評価方法を検討すること、さらに、加害者と被害者の支配-被支配の関係性に注目した「デート DV 支配・被支配度質問紙」を作成しデート DV の加害・被害との関係を検討することを目的に行った。

大学生196名（男性62名，女性134名）を対象に各質問紙を実施し、「付き合い経験がある」と回答した142名（男性48名，女性94名）を分析対象とした。「デート DV 加害・被害深刻度質問紙」は、21のデート DV 行為を基にした「デート DV 加害・被害頻度質問紙」及び「侵害認知度質問紙」により構成された。侵害認知度の21行為の得点に対して因子分析をしたところ、「暴力」、「監視」、「性的強要」、「人格否定」、「不利益の強要」の5因子を得た。5因子ともに女性の方が男性よりもデート DV 行為が自分自身に与える傷つき（侵害度）が大きいと認知していることが示唆された。また、加害頻度が高いほど、その行為に対して自分は傷つかないと認知している傾向があり、この傾向は男性よりも女性の方が顕著であった。さらに被害頻度が高いほど、その行為に対して自分は傷つかないと認知している傾向が示唆され、こちらも男性よりも女性の方が顕著であった。「デート DV 支配・非支配度質問紙」は、「パートナーコントロール質問紙」及び「パートナー決定従順質問紙」により構成された。加害頻度及び加害深刻度が高い者ほど、パートナーをコントロールする傾向が強くなり、この傾向は男性の方が顕著であること、また、パートナーをコントロールしようとする者ほど、デート DV 行為によって傷つかないと認知している傾向にあった。一方、加害頻度が高い者だけではなく被害頻度が高い者も、パートナーをコントロールしようとする傾向があること、加害頻度が高い者ほどパートナーに決定を任せる傾向があり、この傾向は女性で顕著であること、また、パートナーに決定を任せている者は、デート DV 行為に傷つかないと認知している傾向にあり、この傾向は女性で強いことなどが見出された。

キーワード：デート DV，加害・被害深刻度，支配・被支配度，加害・被害頻度，侵害認知度

## 問題と目的

近年、配偶者間の暴力であるドメスティック・バイオレンス（以下、DV という）とともに、若年層の未婚のカップル間にみられる暴力が社会問題として取り上げられている。

親密な関係にある若者間の暴力は、dating violence として1990年代に入り関心が高まってきた（畑下・上間・但馬・菱田・鈴木・辻岡，2005）。Dating violence については国内においても取り上げられており、近年、山口（2003）が「デート DV」と表記したことで、その存在が一層認知されてきた。また、内閣府（2010）は、高校生や大学生などの若年層における交際相手からの暴力の予防啓発教材としてパンフレッ

トやDVDを作成しており、国の DV 予防施策の一環としても、学校現場等で実施できるデート DV 予防教育に取り組んでいる。

これまでの国内外におけるデート DV の評価方法について概観する。国外で最も知られている DV 調査尺度は、Straus（1979,1996）による葛藤戦略尺度（The Conflict Tactics Scales:CTS）とその改訂版である CTS2である（小畑,2013）。CTS2は配偶者虐待の程度を測定するために作成され、性的強要、傷害、交渉、心理的攻撃、身体的暴行の5下位尺度から構成されている。尺度は78の質問項目から構成され、虐待の頻度について8段階で評価を求めるものである（石井・飛鳥・木村・永末，黒澤，2002）。

Straus（2004）は、CTS2を用いて16国の31大学の大学生を対象にデート DV の国際比較研究を実施した。この研究では、交際相手から身体的な暴力を受けた大学生は17% から45% の範囲にあり、中央値に位置

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

する大学では29%の大学生が過去一年間で交際相手から身体的な暴力を受けたと報告している。

国内での研究を概観すると、李・塚本(2005)は、先行研究で示されたDV行為を参考に「身体的DV」「性的DV」「精神的DV」の3カテゴリーに分類し20項目のDV行為を選出し、恋人への加害経験及び被害経験の有無を「全くない」「1,2あった」「何度もあった」の3段階の評価を求め加害経験及び被害経験の性差について検討した。

小泉・吉武(2008)は、先行研究を参考に身体的・精神的・性的暴力等を含む15項目のデートDV行為を選出し、加害・被害の有無の評価を求め性差について検討した。さらに井ノ崎・上野・松並・青野・赤津(2012)、松並・青野・赤澤・井ノ崎・上野(2012)は小泉らが選出した15項目を用い加害経験及び被害経験を「いつも行った(受けた)」から「行ったことがない(受けたことがない)」の4段階の評価を求め性差について検討している。上野・松並・青野・赤澤・井ノ崎(2011)も、小泉らが選出した15項目を用いて4段階の評価を求め性差について検討し、さらに被害経験の15項目について因子分析を行った結果、「身体的暴力・脅迫」因子、「性的暴力・交友監視」因子、「精神的暴力」因子の3因子を得ている。

松野・秋山(2009)は、デートDVとなりうる行為を、先行研究及びDV被害者支援経験をもとに「身体的行為」「精神的行為」「経済的行為」「性的行為」の4区分を基に40行為を選出し、相手に対してする頻度、相手から受ける頻度を「毎日のようにする(される)」から「全くしない」の5段階の評価を求め加害経験及び被害経験の性差について検討した。

このようにデートDV研究の多くは、デートDVになり得る行為を選出し、それらの行為の経験の有無、または、その行為を行った頻度や行為を受けた頻度を評定させて得点化することで、デートDVの加害体験や被害経験をそれぞれ数量的に捉え、加害体験及び被害体験の性差や他の変数との比較検討が行われてきた。

他方、上野(2013)は、デートDVの本質は支配-被支配の関係であり、暴力とされる言動の頻度でデートDVの加害・被害を論じる危うさを指摘し、暴力の内容と頻度のみを測定する方法ではなく、支配-被支配関係をも同時に捉える尺度を開発する必要性を指摘している。伊田(2010)もデートDVを「恋愛関係における二者の間(別れた恋人を含む)の支配/非支配関係、虐待状況、主体の侵害」と定義しており、デートDVの背景には、加害者と被害者の間に成立する支配-被支配の関係性があることを指摘している。デートDVを検証していく一つの指標は、デートDV加害者側がどの程度パートナーを支配している関係にあるか、また被害者側から見ると、どの程度

パートナーに支配されているのか、言い換えれば、被害者がどの程度自己決定ができる関係にあるかが重要と考える。

以上の先行研究から本研究は、次のような2つの目的をもって行われた。

1. これまでのデートDVの実態を捉える指標として用いてきた暴力となりうる行為の加害頻度・被害頻度に加え、行為の深刻度を加味した「デートDV加害・被害深刻度質問紙」を作成し、デートDVの評価方法を検討する。
2. 加害者と被害者の支配-被支配の関係性に注目した「デートDV支配・被支配度質問紙」を作成し、デートDVの加害・被害との関係を検討する。

## 【研究1】「デートDV加害・被害深刻度質問紙」の作成

### 1. 目的

これまでデートDVの加害・被害の実態や程度は、デートDVの対象となる行為を選択し、その行為の加害・被害の頻度を捉えることで把握してきた。しかしながら、一度の暴力でもパートナーに対して十分に恐怖を与え被害者が重度の被害を受けたと思えば、デートDVとしては深刻な加害行為をしていると判断してよいと考えられる。このことは、DV行為の頻度だけではなく、それぞれの行為の侵害度を加味して評価を行う必要性を示している。

被害を受ける場合も同様である。被害者がDV行為をどの程度受けているのかだけではなく、それぞれの行為の侵害度を加味して評価することが必要と言えよう。

本研究では、こうしたデートDV行為の侵害度の違いを加味したデートDVの質問紙を作ることを目的とした。

具体的に作成する質問紙は、デートDVの実態を加害・被害の頻度だけでなく、デートDVとなり得る行為の「侵害認知度」を測定し、加害・被害の頻度と侵害認知度の結果を反映させたものとする。なお、本研究における「侵害認知度」とは、「その行為によって自分がどの程度傷つくかの認知を示すもの」と操作的に定義する。

### 2. 方法

**対象者:** 埼玉県内の大学生196名(男性62名,女性134名,平均年齢20.4歳,SD=1.09)を対象に実施した。本研究では、「付き合い経験がある」と回答した142名(男性48名,女性94名)を分析対象とした。

**調査時期及び調査手続き:** 「大学生の生活意識に関する調査」として大学の授業中に無記名で実施した。調査用紙の配布前に調査の趣旨について説明し、調査用紙配布後に、調査票表紙に印刷されている「任意の協

力による調査であること」、「途中で回答を離脱することができること」、「回答したくない項目には回答しなくてよいこと」、「データは研究目的以外には使用しないこと」、「データの管理を厳格に行うこと」等を読み上げ、データのプライバシー保護には十分注意を払うことを伝えた。さらに、調査票への回答をもって調査への協力を承諾したものと見なすことを伝え、一斉に記載を求めた後にその場で回収した。調査は2014年1月中旬に実施した。

**調査内容**

**(1) デート DV 加害・被害頻度質問紙**

本研究では、デート DV を身体的な暴力に限定するのではなく、心理的、性的暴力、経済的暴力をも含む暴力と位置づけ、「パートナーの発達や心身の健全性を危うくし、身体的、心理的、性的、経済的にパートナーをコントロール・支配しようとする行為」と操

作的に定義する。

当質問紙で取り上げる行為は、松野ら (2009) のデート DV となり得る40行為、ならびに国内外で実施された先行研究や調査で取り上げられたデート DV となり得る行為を整理し、身体的暴力、心理的暴力、性的暴力、経済的暴力の4領域から21行為を選出した。

選定した21行為に対して、加害頻度(その行為を行った頻度)を「会うたびごとにした (5点)」から「全くしなかった (1点)」の5段階評定する加害頻度質問紙、さらに、被害頻度 (その行為をされた頻度) を「会うたびごとにされた (5点)」から「全くされなかった (1点)」の5段階評定する被害頻度質問紙を作成し実施した。

**(2) デート DV 行為の侵害認知度質問紙**

上記の21行為のそれぞれに対して、「その行為により、自分がどの程度傷つくと思うか」をその行為に対する「侵害認知度」とし、「すごく傷つく (5点)」から「全

**Table1 デート DV 行為の侵害認知度の因子分析結果**

項目番号	項目内容	Mean	SD	I	II	III	IV	V
I : 暴力 (α :.893)								
4	机や壁などを殴られたり、殴るふりをされたりする	3.56	1.21	0.854	0.079	0.09	0.049	-0.198
2	身体を押し倒されたり、叩かれたり、殴られたりする	4.04	1.09	0.729	-0.005	0.18	-0.086	0.11
1	物を投げつけられたり、壊されたりする	4.01	1.00	0.703	0.026	-0.058	-0.026	0.227
3	大声で怒鳴られる	3.81	1.06	0.573	-0.186	0.135	0.265	0.053
8	パートナーの意に添わないと長時間無視される	4.01	1.07	0.563	-0.055	-0.294	0.01	0.459
II : 監視 (α :.873)								
13	いつも行き先を告げさせられたり、一日の行動を報告させられる	3.34	1.33	-0.034	0.878	0.119	-0.07	0.01
14	日に何回もメールや電話をさせられたり、素早い返信を求められる	3.23	1.24	-0.032	0.803	0.173	-0.185	0.094
11	異性と一緒に行ったり、話をしたりすると嫉妬される	2.84	1.20	0.045	0.8	-0.116	0.203	-0.214
10	同性の友人との付き合いを制限させられる	3.72	1.10	-0.136	0.5	-0.029	0.22	0.304
9	自分の意志とは関係なく、何でも一方的に決められる	3.47	1.12	0.291	0.406	0.111	0.075	-0.024
III : 性的強要 (α :.922)								
17	性的交渉を強いられる	3.75	1.41	0.019	-0.03	0.947	0.089	-0.057
16	無理矢理キスされたり、身体を触られたり、抱きつかれたりする	3.57	1.33	0.051	0.273	0.742	-0.095	0.001
18	避妊に協力しない	4.11	1.27	-0.091	-0.011	0.601	0.268	0.218
IV : 人格否定 (α :.822)								
6	いつもバカにされたり、見下したような言い方をされる	3.87	1.05	0.01	0.073	0.001	0.87	-0.031
7	人前で恥をかかせられる	4.15	1.00	0.047	0.062	0.007	0.711	0.05
5	汚いことばでののしられたり、わざと嫌な呼び方で呼ばれる	3.93	1.07	0.158	-0.064	0.183	0.607	0.016
V : 不利益の強要 (α :.868)								
20	お金を貸すことを求められたり、とられたりする	3.98	1.15	0.061	-0.196	0.281	-0.059	0.748
12	無断で相手の携帯メールや着信履歴、電話番号を見られたり、消されたりする	3.98	1.19	-0.024	0.342	-0.134	0.139	0.558
21	バイトをやめさせられる	3.87	1.20	0.136	0.012	0.192	0.009	0.532
15	すぐに別れる話を持ち出されたり、別れるなら死んでやると言われる	3.95	1.17	0.255	0.22	-0.111	0.029	0.496
19	デート等でいつも自分がお金を払わされる	3.70	1.14	0.087	0.071	0.427	-0.088	0.446
因子間相関								
				I	II	III	IV	V
				I	0.394	0.639	0.658	0.647
				II		0.567	0.519	0.594
				III			0.554	0.626
				IV				0.606

く傷つかない(1点)」の5段階評定する侵害認知度質問紙を作成し実施した。

### (3) デートDV加害・被害深刻度質問紙の構成

デートDV加害頻度質問紙と侵害認知度質問紙とを組み合わせたものを「デートDV加害深刻度質問紙」とし、被害頻度質問紙と侵害認知度質問紙とを組み合わせたものを「デートDV被害深刻度質問紙」として構成した。

具体的には、加害深刻度を「自分自身が傷つくと思うことをパートナーに行っている程度」と定義し、21行為のそれぞれについて、加害頻度の評価点と侵害認知度の評価点の乗算積を「加害深刻度得点」とした。さらに被害深刻度についても「自分自身が傷つくと思うことをパートナーから受けている程度」と定義し、21行為のそれぞれについて、被害頻度の評価点と侵害認知度の評価点の乗算積を「被害深刻度得点」とした。

## 3. 結果と考察

### (1) 21行為に関する因子構造の検討

選出した21行為の因子構造を検討するため、加害深刻度及び被害深刻度を算出する際に共通項目となる侵害認知度質問紙の21行為の得点に対して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、Table 1のように因子負荷量0.400以上を基準に5因子21行為を採用した。第1因子は「机や壁などを殴ったり、殴るふりをされたりする」、「身体を押し倒されたり、叩かれたり、殴られたりする」、「物を投げつけられたり、壊されたりする」、「大声で怒鳴られる」、「パートナーの意に添わないと長時間無視される」の5項目であり、「暴力」因子と命名した。第2因子は「いつも行き先を告げさせられたり、一日の行動を報告させられる」、「日に何回もメールや電話をさせられたり、素早い返信を求められる」、「異性と一緒に行ったり、話をしたりすると嫉妬される」、「同性の友人との付き合いを制限させられる」、「自分の意志とは関係なく、何でも一方的に決められる」の5項目であり、「監視」因子と命名した。第3因子は「性的交渉を強いられる」、「無理矢理キスされたり、身体を触られたり、抱きつかれたりする」、「避妊に協力しない」の3項目であり、「性的強要」因子と命名した。第4因子は「いつもバカにされたり、見下したような言い方をされる」、「人前で恥をかかせられる」、「汚いことばでののしられたり、わがを嫌な呼び方で呼ばれる」の3項目であり、「人格否定」因子と命名した。第5因子は「お金を貸すことを求められたり、とられたりする」、「無断で相手の携帯メールや着信履歴、電話番号を見られたり、消されたりする」、「バイトをやめさせられる」、「すぐに別れ話を持ち出されたり、別れるなら死んでやると言われる」、「デート等でいつも自分がお金を払われる」の5項目で「不利益の強要」因子と命名した。

Table2 侵害認知度5因子における性差のt検定結果

	男性		女性		t
	Mean	SD	Mean	SD	
暴力	16.46	5.17	20.94	3.35	-5.45**
監視	14.85	5.07	17.44	4.59	-3.04**
性的強要	8.44	3.79	12.98	2.61	-7.45**
人格否定	10.73	3.33	12.56	2.28	-3.43**
不利益の強要	16.54	5.30	20.99	3.59	-5.23**

$p < .05^* \quad p < .01^{**}$

5因子の下位尺度の信頼性を求めたところ、クロンバックの $\alpha$ 係数は、「暴力」因子が.893、「監視」因子が.873、「性的強要」因子が.922、「人格否定」が.822、「不利益の強要」因子が.868と信頼性が確認された。

### (2) 侵害認知度5因子の性差に関する検討

侵害認知度5因子(下位尺度)の性差について検討するため、因子ごとにt検定を行ったところ、Table 2のように「暴力」因子( $t = -5.45, p < .01$ )、「監視」因子( $t = -3.04, p < .01$ )、「性的強要」因子( $t = -7.45, p < .01$ )、「人格否定」因子( $t = -3.43, p < .01$ )、「不利益の強要」因子( $t = -5.23, p < .01$ )において、いずれも1%水準で有意差が認められ、女性の方が男性よりもデートDV行為により自分が傷つくと考えていた。

### (3) 加害・被害深刻度、加害・被害頻度、侵害認知度の相関

各対象者の21行為の加害頻度評価点を加算した結果を「加害頻度総得点」とし、各対象者の21項目の被害頻度評価点を加算した結果を「被害頻度総得点」とした。また、各対象者の21行為の加害深刻度評価点を加算した結果を「加害深刻度総得点」とし、各対象者の21行為の被害深刻度評価点を加算した結果を「被害深刻度総得点」とした。さらに、各対象者の21行為の侵害認知度評価点を加算した結果を「侵害認知度総得点」とした。

Table 3に示すように男女合わせた全体では、加害頻度総得点と加害深刻度総得点との相関は.66( $p < .01$ )であり、やや強い有意なプラスの相関があった。また、加害頻度総得点と侵害認知度総得点との相関は-.22( $p < .01$ )であり、弱い有意なマイナスの相関があった。

Table3 加害頻度、加害深刻度、侵害認知度の相関(全体)

	加害頻度 総得点	加害深刻度 総得点	侵害認知度 総得点
加害頻度総得点	—	0.66**	-0.22**
加害深刻度総得点		—	0.57**
侵害認知度総得点			—

$p < .05^* \quad p < .01^{**}$



Table4 被害頻度, 被害深刻度, 侵害認知度の相関  
(全体)

	被害頻度 総得点	被害深刻度 総得点	侵害認知度 総得点
被害頻度総得点	—	0.69**	-0.18*
被害深刻度総得点		—	0.55**
侵害認知度総得点			—
		$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table5 加害頻度, 加害深刻度, 侵害認知度の相関  
(男性)

	加害頻度 総得点	加害深刻度 総得点	侵害認知度 総得点
加害頻度総得点	—	0.75**	-0.10
加害深刻度総得点		—	0.57**
侵害認知度総得点			—
		$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table6 加害頻度, 加害深刻度, 侵害認知度の相関  
(女性)

	加害頻度 総得点	加害深刻度 総得点	侵害認知度 総得点
加害頻度総得点	—	0.63**	-0.40**
加害深刻度総得点		—	0.43**
侵害認知度総得点			—
		$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

さらに加害深刻度総得点と侵害認知度総得点との相関は .57 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意のプラスの相関があった。

Table 4に示すように, 男女合わせた全体では, 被害頻度総得点と被害深刻度総得点との相関も .69 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意なプラスの相関があった。また, 被害頻度総得点と侵害認知度総得点との相関も -.18 ( $p < .05$ ) であり, 弱い有意なマイナスの相関があった。さらに被害深刻度総得点と侵害認知度総得点との相関は .55 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意のプラスの相関があった。

男女別に見てみると, Table 5に示すように男性では, 加害頻度総得点と加害深刻度総得点との相関は .75 ( $p < .01$ ) であり, 強い有意なプラスの相関があった。また, 加害頻度総得点と侵害認知度総得点との相関は -.10 (n.s.) であり, 極めて弱いマイナスの相関があった。さらに加害深刻度総得点と侵害認知度総得点との相関は .57 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意なプラスの相関があった。

女性では Table 6に示すように, 加害頻度総得点と加害深刻度総得点との相関は .63 ( $p < .01$ ) であり, や

Table7 被害頻度, 被害深刻度, 侵害認知度の相関  
(男性)

	被害頻度 総得点	被害深刻度 総得点	侵害認知度 総得点
被害頻度総得点	—	0.69**	-0.22
被害深刻度総得点		—	0.53**
侵害認知度総得点			—
		$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table8 被害頻度, 被害深刻度, 侵害認知度の相関  
(女性)

	被害頻度 総得点	被害深刻度 総得点	侵害認知度 総得点
被害頻度総得点	—	0.77**	-0.24*
被害深刻度総得点		—	0.42**
侵害認知度総得点			—
		$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

や強い有意なプラスの相関があった。また, 加害頻度総得点と侵害認知度総得点との相関は -.40 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意なマイナスの相関があった。さらに加害深刻度総得点と侵害認知度総得点との相関は .43 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意なプラスの相関があった。

Table 7に示すように男性では, 被害頻度総得点と被害深刻度総得点との相関は .69 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意なプラスの相関があった。また, 被害深刻度総得点と侵害認知度総得点との相関は .53 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意なプラスの相関があった。

また, 女性では Table 8に示すように, 被害頻度総得点と被害深刻度総得点との相関は .77 ( $p < .01$ ) であり, 強い有意なプラスの相関があった。また, 被害頻度総得点と侵害認知度総得点との相関は -.24 ( $p < .05$ ) であり, 弱い有意なマイナスの相関があった。さらに被害深刻度総得点と侵害認知度総得点との相関は .42 ( $p < .01$ ) であり, やや強い有意なプラスの相関があった。

以上の結果のうち, まず侵害認知度5因子の性差を見ると, どの因子も女性の方が男性よりも自分自身は傷つくと認知しており, 女性の方が男性よりもデートDV 行為が全般にわたり自分自身に与える傷つき(侵害度)が大きいと認知していることが示唆された。

次に, 加害頻度, 加害深刻度, 侵害認知度の相関結果では, 加害頻度と侵害認知度との間にマイナスの相関が見られたことから, 加害頻度が高い者ほど, その行為に対して自分は傷つけないと認知している傾向があり, またデートDV 行為の侵害認知度を低く見積もるほどパートナーに対してデートDV 加害をより多く行うことが示唆された。この特徴は男性よりも女

性において顕著であった。

被害頻度、被害深刻度、侵害認知度の相関結果では、被害頻度と侵害認知度の間にマイナスの相関が見られたことから、被害頻度が高い者ほど、それらの行為に対して自分は傷つかない認知している傾向が示唆された。この結果は、被害頻度が高いほど自分は傷つくと認知していると予想していたのとは逆の結果であり、デートDVでは、被害頻度が高い者ほど、そのDV行為に慣れていくためか、自分の受けた行為をたいしたことではないと考える傾向が示唆された。この特徴においても、やはり男性よりも女性の方が顕著であった。

デートDVでは、女性は男性よりもデートDV行為により自分自身が受ける傷つきが大きいと感じているが、加害頻度が高い女性及び被害頻度が高い女性は、両者ともにそれらの行為をたいしたことはないと考えていることが示唆された。

## 【研究2】デートDV支配・被支配度質問紙の作成

### 1. 目的

デートDVは行為そのものが問題であるとともに、パートナーとの人間関係のあり方が問題であるとも言える。デートDVが深刻化していけば行くほど、パートナーとの人間関係は歪み、そこには支配する者と支配される者の関係がより強く形成されていくかもしれない。また、その逆も成り立つ可能性がある。

本研究では、デートDVの背景にある支配-被支配の関係性に注目し、デートDVにおける支配・被支配関係を明らかにする質問紙を作成することを目的とする。合わせて、デートDVの加害・被害頻度、加害・被害深刻度、侵害認知度と支配-被支配の関係性との関連について検討する。

### 2. 方法

対象者：研究1に同じ。

調査時期及び調査手続き：研究1に同じ。

#### デートDV支配・被支配度質問紙の構成

デートDV支配・被支配度質問紙は、以下の「パートナーコントロール質問紙」及び「パートナー決定従順質問紙」の2つの質問紙で構成した。

#### (1) パートナーコントロール質問紙

パートナーコントロール質問紙は、パートナーを自分の意のままに操作しようとする行為や傾向を測定しようとするものであり、井梅・平井・青木・馬場(2006)が作成した青年期用対象関係尺度の5因子の一つである「自己中心的な他者操作」7項目を参考に作成した。井梅ら(2006)は、最終的に7項目のうち5項目( $\alpha = .748$ )を採用したが、パートナーコントロール質問紙では、対象を付き合っているパートナーに限定し、パートナーとの付き合いをより実感を持って考えられ

るように表現に修正を加え、パートナーの付き合いとは無関係な1項目を除いた6項目を採用し実施した。具体的な質問内容としては「私は、自分の思い通りになるようパートナーに働きかけることが多い」、「自分の欲求を実現するために、パートナーを利用することは許されると思う」などを採用した。

#### (2) パートナー決定従順質問紙

「パートナー決定従順質問紙」は、パートナーの決定に任せようとする行為や傾向を測定しようとするものであり、桜井(1993)が大学生を対象に作成した「自己決定感尺度」8項目( $\alpha = .80$ )を逆転項目として活用した。対象を付き合っているパートナーに限定し、パートナーとの付き合いをより実感を持って考えられるように表現に修正を加え、内容の重複とパートナーとの付き合いとは無関係な2項目を削除し6項目を採用し実施した。具体的な質問内容としては「自分のすることは、些細なことでも、パートナーに決めてもらうことが多い」、「自分がやりたいと思うことでも、パートナーからやめろと言われたら、やめている」などを採用した。

## 3. 結果と考察

### (1) パートナーコントロール質問紙及びパートナー決定従順質問紙の信頼性

パートナーコントロール質問紙6項目のクロンバックの $\alpha$ 係数は.885であり、信頼性が確認された。また、パートナー決定従順質問紙6項目のクロンバックの $\alpha$ 係数は.711であり、信頼性が確認された。

### (2) パートナーコントロールと加害頻度・深刻度、被害頻度・深刻度、侵害認知度の相関

各対象者の6項目のパートナーコントロール評価得点を加算した結果を「パートナーコントロール総得点」とした。

Table 9に示すように男女合わせた全体では、パートナーコントロール総得点と加害頻度総得点との相関は.40 ( $p < .01$ )であり、やや強い有意なプラスの相関があった。パートナーコントロール総得点と加害深刻度総得点との相関は.20 ( $p < .05$ )であり、弱い有意なプラスの相関があった。パートナーコントロール総得点と被害頻度総得点との相関は.23 ( $p < .01$ )であり、弱い有意なプラスの相関があった。パートナーコントロール総得点と侵害認知度総得点との相関は-.18 ( $p < .05$ )であり、極めて弱い有意なマイナスの相関があった。

男女別に見ると、Table 10に示すように男性では、パートナーコントロール総得点と加害頻度総得点との相関は.51 ( $p < .01$ )であり、やや強い有意なプラスの相関があった。パートナーコントロール総得点と加害深刻度総得点との相関は.36 ( $p < .05$ )であり、弱い有意なプラスの相関があった。

Table 9 パートナーコントロール総得点と加害頻度・深刻度, 被害頻度・深刻度, 侵害認知度の相関 (全体)

	加害頻度総得点	加害深刻度総得点	被害頻度総得点	被害深刻度総得点	侵害認知度総得点
パートナーコントロール	0.40**	0.20*	0.23**	0.10	-0.18*
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table 10 パートナーコントロール総得点と加害頻度・深刻度, 被害頻度・深刻度, 侵害認知度の相関 (男性)

	加害頻度総得点	加害深刻度総得点	被害頻度総得点	被害深刻度総得点	侵害認知度総得点
パートナーコントロール	0.51**	0.36*	0.28	0.21	-0.05
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table 11 パートナーコントロール総得点と加害頻度・深刻度, 被害頻度・深刻度, 侵害認知度の相関 (女性)

	加害頻度総得点	加害深刻度総得点	被害頻度総得点	被害深刻度総得点	侵害認知度総得点
パートナーコントロール	0.27**	0.19	0.21	0.19	-0.11
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table 12 パートナー決定従順質問紙と加害頻度・深刻度, 被害頻度・深刻度, 侵害認知度の相関 (全体)

	加害頻度総得点	加害深刻度総得点	被害頻度総得点	被害深刻度総得点	侵害認知度総得点
パートナー決定従順	0.18*	0.07	0.05	-0.07	-0.15
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table 13 パートナー決定従順質問紙と加害頻度・深刻度, 被害頻度・深刻度, 侵害認知度の相関 (男性)

	加害頻度総得点	加害深刻度総得点	被害頻度総得点	被害深刻度総得点	侵害認知度総得点
パートナー決定従順	0.08	0.13	0.13	0.14	0.07
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table 14 パートナー決定従順質問紙と加害頻度・深刻度, 被害頻度・深刻度, 侵害認知度の相関 (女性)

	加害頻度総得点	加害深刻度総得点	被害頻度総得点	被害深刻度総得点	侵害認知度総得点
パートナー決定従順	0.26*	0.14	0.03	-0.07	-0.14
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

また Table 11 のように女性では, パートナーコントロール総得点と加害頻度総得点との相関は .27 ( $p < .01$ ) であり, 弱い有意なプラスの相関があった。

パートナーコントロールと加害頻度及び加害深刻度との間にプラスの有意な相関が見られたことから, 加害頻度と加害深刻度が高い者は, パートナーを自分の思う通りにコントロールしようとする傾向があり, この傾向は男性の方がより顕著であった。また, デート DV 被害者はパートナーをコントロールしないとの当初の予想に反し, 被害頻度とパートナーコントロールにプラスの有意な相関が見られたことから, 被害頻度が高い人もまたパートナーをコントロールしようとする傾向が示唆された。さらに, パートナーコントロールと侵害認知度との間にマイナスの有意な相関が見られたことから, パートナーをコントロールしようとする者ほど, それらの行為に自分は傷つかないと認知している傾向が示唆された。

### (3) パートナー決定従順と加害頻度・深刻度, 被害頻度・深刻度, 侵害認知度の相関

各対象者の6項目のパートナー決定従順評価得点を加算した結果を「パートナー決定従順総得点」とした。

また Table 12 に示すように, 全体では, パートナー決定従順総得点と加害頻度総得点は .18 ( $p < .05$ ) であり, 極めて弱い有意なプラスの相関があった。

男女別にみると, Table 13 に示すように男性では有意な相関は見られなかった。また, Table 14 で示すように女性において, パートナー決定従順総得点と加害頻度総得点は .26 ( $p < .05$ ) であり, 弱い有意なプラスの相関があった。

デート DV 加害者はパートナーの決定とは関係なく自分自身の決定が優先するとの当初の予想に反し, 加害頻度とパートナー決定従順間にプラスの有意な相関が見られたことから, 加害頻度が高い者ほど, パートナーの決定を任せる傾向があり, この傾向は女性の方が顕著であることが示唆された。DV 被害を多く受ける者はパートナーの決定に任せやすい傾向が見られるかと予想したが, それらの間には有意な相関が見られなかった。

### (4) パートナー決定従順と侵害認知度5因子との相関

デート DV 行為に対する自分自身の傷つきとパートナー決定従順との関係についてみるため, パートナー決定従順総得点と侵害認知度5因子 (下位尺度) との相関について検討した。

Table 15 に示すようにパートナー決定従順総得点と侵害認知度5因子との相関を見ると, 男女を合わせた全体では, パートナー決定従順総得点と暴力因子得点, 監視因子得点, 性的強要得点, 人格否定得点, 不利益



Table 15 侵害認知度5因子とパートナー決定従順総得点との相関（全体）

	暴力因子得点	監視因子得点	性的強要因子得点	人格否定因子得点	不利益の強要得点
パートナー決定従順総得点	-0.065	-0.039	-0.159	-0.13	-0.184*
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table 16 侵害認知度5因子とパートナー決定従順総得点との相関（男性）

	暴力因子得点	監視因子得点	性的強要因子得点	人格否定因子得点	不利益の強要得点
パートナー決定従順総得点	0.144	0.118	0.124	0.065	0.002
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

Table 17 侵害認知度5因子とパートナー決定従順総得点との相関（女性）

	暴力因子得点	監視因子得点	性的強要因子得点	人格否定因子得点	不利益の強要得点
パートナー決定従順総得点	-0.057	-0.047	-0.189	-0.171	-0.191
				$p < .05^*$	$p < .01^{**}$

の強要因子得点ともに有意差はないがマイナスの相関がみられ、各因子ともにパートナーに決定を任せている者ほど、デートDV行為に対して自分自身は傷つけないと認知している傾向が示唆された。

さらに男女別にみると、Table 16に示すように男性では、パートナー決定従順総得点と暴力因子得点、監視因子得点、性的強要得点、人格否定得点、不利益の強要因子得点ともに有意差はないが一貫してプラスの相関がみられ、一方、Table 17に示すように女性ではいずれも有意差はないが、一貫してマイナスの相関を示した。このように男性では、パートナーに決定を任せているほど、デートDV行為により自分自身は傷つくことと認知している傾向があり当初の予想を支持する傾向であったが、女性では反対に、パートナーに決定を任せているほど、デートDV行為により自分自身は傷ついていないと認知している傾向が示唆され、パートナー決定従順と侵害認知度間には性差が認められた。

### 総合考察

上記の研究1の結果で得られたように加害頻度が高い者ほどデートDV行為に自分自身は傷つかないこと、また研究2の結果で得られたように加害頻度及び加害深刻度が高い者ほど、パートナーをコントロールする傾向が強く、男性の方が女性よりも顕著であること、また、パートナーをコントロールしようとする者ほど、デートDV行為によって傷つかないと認知している傾向にあることは、当初の予想を支持する結果であった。

また新たな知見として、加害頻度が高い女性ほど、デートDV行為に傷つかないと認知している傾向が男性よりも顕著であること、被害頻度が高い者ほど、デートDV行為に対して自分は傷つかないと認知している傾向があり、この傾向は女性で顕著であること、加害頻度が高い者だけではなく被害頻度が高い者も、パートナーをコントロールしようとする傾向があるこ

と、加害頻度が高い者ほどパートナーに決定を任せる傾向があり、この傾向は女性で顕著であること、また、パートナーに決定を任せている者は、デートDV行為に傷つかないと認知している傾向にあり、この傾向は女性で強いことが挙げられ、当初の予想とは異なる結果が得られた。

これらの知見の背景には、一般的な大学生では、DVに見られるような一方的な支配-被支配関係だけではなく、加害・被害経験を相互に働きかける関係性の中で起きている可能性があることや今まで明らかにされてこなかったデートDV特有の性差があることが考えられる。特に女性については、加害・被害ともにこれまで考えられていた特徴と異なる実態を示す可能性が示唆された。

デートDVは男性から女性への一方的な暴力ではなく、パートナー間で相互に行われるといったいわゆる「加害・被害経験の相互性」が指摘されている（松野 2014）。デートDVについて検討する際は、DVのように一方的な加害者・被害者というモデルではなく、加害・被害経験の質や両者の関係性のレベルを想定した枠組みの中で検討することが望まれる。今後は、調査対象者を加害・被害経験別に群分けし、両者の様々な関係性を基にそれぞれの指標を用いて再検討したい。

### 引用文献

- 畑下博世・上間美穂・但馬直子・菱田知代・鈴木ひとみ・辻岡芳美 (2005). “デートDV”文献レビュー. 保健師ジャーナル, 61 (11), 1077-1083.
- 石井朝子, 飛鳥井望, 木村弓子, 永末貴子, 黒澤美智子 (2002). 改訂葛藤戦略尺度日本語版 (The Revised Conflict Tactics Scales:CTS2) の信頼性と妥当性 日本心理学会第66回大会発表論文集, p277.
- 伊田広行 (2010). デートDVと恋愛 大月書店
- 井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子・赤津



- 淳子 (2012). 大学生におけるデート DV 加害及び被害経験と愛着との関係 学校危機とメンタルケア, 4, 49-64.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 (2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, 14 (2), 181-193.
- 小泉奈央・吉武久美子 (2008). 青年期男女におけるデート DV に関する認識についての調査 純心現代福祉研究, 12, 61-75.
- 李 環媛・塚本宣子 (2005). デイティング DV に関する研究 - 大学生の実態調査に基づいて - 宮崎大学教育文化学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術科学, 13, 1-18.
- 松並知子, 青野篤子, 赤澤淳子, 井ノ崎敦子, 上野淳子 (2012). デート DV の実態と心理的要因 - 自己愛との関連を中心に - 女性学評論, 26, 43-65.
- 松野 真・秋山胖 (2009). 若年層における特定異性間の暴力 (dating violence) に関する研究 - 大学生を対象とした dating violence に関する意識・実態について - 生活科学研究, 31, 117-128.
- 松野真 (2014). 大学生におけるデート DV の加害・被害経験タイプとその特性 日本発達心理学会第 25 回大会発表論文集, p.421.
- 内閣府男女共同参画局 (2010). 人と人とのよりよい関係をつくるために 交際相手とのすてきな関係をつくっていくには.
- 小畑千晴 (2013). デートバイオレンス可能性尺度の作成について 奈良大学大学院研究年報, 18, 45-52.
- 桜井茂男 (1993). 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要 29, 203-208.
- Straus, M.A. (1979). Measuring intrafamily conflict and violence. The Conflict Tactics (CT) Scales. Journal of Marriage and The Family, 41, 75-88.
- Straus, M. A. (2004). Prevalence of violence against dating partners by male and female university students worldwide. Violence against women, 10(7), 790-811.
- Straus, M.A., Hamby, S.L., Boney-McCoy, S., & Sugarman, D.B. (1996). The Revised Conflict Tactics Scales (CTS2). Development and preliminary psychometric Data. Journal of Family Issues, 17, 283-316.
- 上野淳子, 松並知子, 青野篤子, 赤澤淳子, 井ノ崎敦子 (2011). 大学生の性に対する態度がデート DV に及ぼす影響 四天王寺大学紀要, 53, 111-122.
- 上野淳子 (2013). デート DV 研究の問題点 四天王寺大学紀要, 57, 195-206.
- 山口のり子 (2003). デート DV 防止プログラムの実施者向けワークブック 梨の木舎

-2015. 2. 1 受稿, 2015. 3. 7 受理-

# Construction of Dating Violence perpetrator-victim damage severity questionnaire and Dating Violence control-controlled questionnaire

Makoto MATSUNO (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Kunijiro ARAI (*Tokyo Seitoku University*)

The first purpose of this study was to construct "Dating Violence perpetrator-victim damage severity questionnaire" and to examine the method of evaluating dating Violence. As for the second purpose was to construct "Dating Violence control-controlled questionnaire" and to examine the relation with dating violence perpetrator-victim damage severity. The Questionnaires was executed for 196 university students (62 men and 134 females). 142 students (48 men and 94 females) who had answered "they had a relationship experience." were analyzed. "Dating violence perpetrator-victim damage severity questionnaire" was composed by "Dating Violence offending and damage frequency questionnaire" and "Damage serious degree questionnaire" based on 21 dating Violence acts.

The factorial analysis was done to the score of 21 acts in damage serious degree questionnaire. As a result, five factors "Violence", "monitoring", "sexual compulsion", "character denial", and "compulsion of the disadvantage" were obtained. In all factors, it was suggested that the female recognizes that the damage by which a dating Violence act gives it to itself (the degree of damage severity) was bigger than the man. The person with high offending frequency tended to acknowledge that I am not wounded. The female of this tendency was more remarkable than that of the man.

"Dating Violence control-controlled questionnaire" was composed by "Partner control questionnaire" and "Partner decision obedience questionnaire". The tendency to the person with a high offending frequency and offending severity degree to control the partner was strong. The man of this tendency was more remarkable than that of the female. Not only the person with high offending frequency but also the person with damage frequency tended also to control the partner. Moreover, the person with high offending frequency tended to leave the decision to the partner. The female of this tendency was more remarkable than that of the man. Moreover, the person who was leaving the decision to the partner showed the tendency to acknowledge oneself was not wounded. The female of this tendency was stronger than that of the man.

**Key words:** dating Violence, Dating Violence perpetrator-victim damage severity questionnaire, Dating Violence control-controlled questionnaire, Dating Violence offending and damage frequency questionnaire, Damage serious degree questionnaire

*Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University*  
2015, Vol. 15, pp.187-196